# 社会的養護を受けている子ども達のための専門家ネットワーク・ミーティングにおける観察と注目

Jenifer Wakelyn（ジェニファー・ウェイクリン）

First Step, Child and Family Directorate, Tavistock and Portman NHS Foundation Trust, London, United Kingdom

## まとめ

この論文では、注意（注目）※についての理論的な考えを概観する。その後、実際のケースを提示することで、社会的養護を受けている幼児のための専門家ネットワークの業務や考え方に、観察をベースとした治療的な介入における注意という機能が、どのようにプラスになるかを示す。結語の部分では、フロイトとビックの理論を、この観察による治療的なサポートと結びつけるとともに、ワーク・ディスカッションが臨床家の支えとなることに言及する

※原文では attention という用語が用いられており、この語には日本語として「注意」という意味と「注目」という意味がある。Watch Me Play！プロジェクトでは「注目」という訳語を用いているが、フロイトなどの古典的な論文では「注意」という訳語が伝統的に選択されてきた。この日本語訳では、両方の訳が場所によって混在している。（監訳者注）

## キーワード

観察、注意、社会的養護を受けている乳幼児、専門家ネットワーク、遊び

本報告書は早稲田大学社会的養育研究所が Tavisotck and Portman NHS の Jenifer Wakelyn 先生から、また雑誌 Infant Observation から許可を得て原著　Observation and attention in professional network meetings for children in care, Infant Observation,　(2019)　を日本語訳したものです。日本語訳作成をご快諾いただいた Jenifer Wakelyn 先生、監訳チームで本論文をご担当いただいた半田聡先生、そして本事業に助成していただいた日本財団に心より感謝申し上げます。

早稲田大学社会的養育研究所
所長　上鹿渡和宏

# 目次

まとめ ..... 2
キーワード ..... 2
はじめに ..... 4
社会的養護を受けている乳幼児にとっての逆境 ..... 4
治療的観察 ..... 5
**RAHAN**（ラハン） ..... 6
考察 ..... 9
サービスの背景 ..... 10
**ANIA**（アニャ） ..... 11
考察 ..... 13
**WATCH ME PLAY!** ..... 13
ヘンリー：遊ぶことができなかった **2** 歳児 ..... 14
考察 ..... 15
結語 ..... 16

## はじめに

フロイトは注意という機能について、「観察思考の一つの形」であると描写し、そこには能動的な側面と受動的(あるいは受容的)な側面という、2 つの異なる側面があると考えていた。能動的な側面についてフロイトは、それは「知覚を迎えにいく」ものだと描写している。一方で受動的な側面は、分析家が患者の本能的な部分と最もダイレクトに接触するために望ましい態度として彼が推奨した、「平等に漂う注意／自由に彷徨う注意」という姿勢に見ることができる（1912 年、1923 年）。フロイトはまた、注意とは「知覚したものをまとめあげ、そこに意味のパターンを見つけ出す」ための心のエネルギーの一つの形だとも描写している。1940 年代にタビストック方式乳幼児観察を開発した児童分析家エスター・ビックの考え方には、こういう「まとめていく」という発想がはっきりと現れていた。以下は、ジアナ・ウィリアムズが報告したコメントの中で彼女が述べた内容である：

> 彼女のふるまいや話すことのすべてに対してあなたが注ぐ注意は、彼女のパーソナリティの断片を手繰り寄せる磁石ー鉄粉を引き寄せるあの磁石ーのように作用する。それこそ母親の注意が赤ちゃんに為すことでもある。(Williams, 1998 年、p. 94 に引用された私信)

この論文では、社会的養護を受けている幼児のための専門家ネットワークの業務や考え方に対して、観察をベースにした治療的介入における注目(注意)という機能が、どんなプラスの役割を果たしているかを見ていく。

## 社会的養護を受けている乳幼児にとっての逆境

乳幼児は幼すぎて感情や記憶を持てないという発想は、世代が変わっても、そのたびにまた出て来るようである。今日では、マルトリートメントを受けた子ども達にはある種の脆弱性があり、それが彼らの社会的・心理的な困難のリスクを高めるということが神経科学的に裏付けられているが、それでもまだ上記のような考えは根強く残っている。こういうリスクは、里親、ソーシャルワーカー、臨床家たちのよく知るところであり、現在では、脳の発達研究で一層明らかにされつつある（McCrory, De Brito, & Viding, 2010; McCrory et al., 2011）。

これは一体なぜなのだろうか？子ども達が虐待やネグレクトに遭っていると、関係者には強烈な情緒が引き起こされるが、このことが、子ども達のニーズが見過ごされる結果につながり得る（Emanuel, 2006）。どういうことかと言うと、子どもたちが怪我をしたり、あるいは深刻な被害を受けるリスクがあったりすると、まず彼らの身体的な安全に目が行くのは当然だが、このことが、彼らの体験が心理的にはどういう影響を持つのかという側面を、うっかり見落とすことにつながり得るのである。乳幼児のメンタルヘルス上の困難があまり認識されていないことに加えて、さらに複雑なのは、人との関わりの中で心が壊れないように守るために最早期の乳児ですら心を閉ざしてしまうことや、人は他者から拒絶をされると恥という感覚が生まれること、そして、ニーズが満たされない時にそれを隠したいという衝動に襲われること等である。このように、社会的養護を受けている子ども達には未だ認識されていない苦悩があり、このことが彼らにとって更なる逆境の一端となり得るのである。

私の考えでは、観察的なアプローチと「注目」の持つまとめあげる機能は重要な役割を担っている。つまりこれらのお陰で、逆境を経験した幼い子ども達がどんなニーズを持ち、どんな体験をしているのか、専門家ネットワークや家庭裁判所の人たちの心に、生き生きとしたリアルなものとして保たれるのである。そして、観察的なアプローチによって注目されることがなければ、気付かれないまま見過ごされてしまうかもしれない子ども達が、他者の心に抱えられているという体験をすることができるようになる。

## 治療的観察

介入としての治療的観察のルーツは、精神分析的な乳幼児観察にある。乳幼児観察は訓練の中核的な一翼を担っており、最大 2 年間にわたって赤ちゃんや幼児の家庭を毎週訪問することで、観察の技術を身に付けるものである。

> 精神分析的な理解に基づく観察は、私たちの心と精神が互いに触れ合えるようになるための媒体となる。この観察は、観察者が今この瞬間に全身全霊で立ち会うことを求められる空間を提供するとともに、*考える*ために*感じる*、つまり慎重で注意深いつながりを築くための時間を与える活動なのである。 (Ruch, 2016, p. 4)

この学習方法には 3 つの要素が不可欠である。

- 合意によって決まった時刻に、毎週 1 回、1 時間の家庭訪問を行う。その中で観察者は、相互交流やコミュニケーションの細部、そして観察者として自らに引き起こされる情緒的な反応に細心の注意を払う。
- 毎回の訪問後、思い出せる限り詳細に観察時間中の乳幼児の発達と相互交流の流れを記録し、観察者に特に強い情緒的なインパクトを与えたことがあれば、それもあわせて記録する。
- また週 1 回のセミナーグループでディスカッションを行い、社交的な会話や、専門家としての役割を担う必要性などに気を取られることなく、乳幼児から可能な限り多くのことを探索し学ぶ。訓練としての観察では、法令に基づくサービスが関与していない典型的な家族を観察することを目的としている。

訓練の一環として行われる観察は学生の学習を主な目的としているが、観察の受け入れを選択した多くの家庭では、それが自分たちにとっても役立つと感じたことを報告している。侵入的になったり説教臭くなったりすることなく、赤ちゃんの生活のあらゆる些事や、赤ちゃんが家族全体に及ぼす影響に関心を抱く大人が定期的に訪問することは、歓迎され得る。親の中には、観察者が居ることで、自分たちも我が子が育っていくのをより詳細に観察する上での励みになったとコメントした人たちもいる（Watillon-Naveau, 2008）。この認識は、治療目的のために乳幼児観察を応用することにつながってきた（Urwin & Sternberg, 2012）。

治療的な観察者は、訓練のための観察者よりもいっそう積極的な役割を果たし、例えば、他の方法では見過ごされがちな仕草や音に注意を払ったりする。しかし、このアプローチを構成するものは同じ 3 つの要素である。

- 観察訪問は家族の都合の良い時間帯に行われ、その頻度は週に 1 回未満となる場合もある。
- それでもなお、観察訪問が決まった時刻に行われるようスケジュールを組み、
- 毎回の訪問後には詳細なメモを作成して、グループまたは経験豊富な臨床家によるスーパービジョンの中でディスカッションを行う。

私が児童青年期精神療法士として働いている精神保健サービスにおいて、私は、養子縁組に出された赤ちゃんの治療的観察の受け入れについて臨床研究を行う貴重な機会を得た（Wakelyn, 2011、2012）。これまでの研究は、有望な結果を示すものではあるが、自閉症スペクトラム障害の初期の徴候を示す幼児を対象としたものであった（Rhode, 2007）。

この 10 ヶ月間に渡る観察の報告では、観察者が専門家ネットワークのケアプラン作りに貢献する可能性に焦点を当てる。参加者の個人情報の保護のため、名前や身元の詳細は変更されている。研究を終えた後、里親やソーシャルワーカー達が、社会的養護を受けている乳幼児やその世話をしている人たちのニーズをよりよく理解するために、研究結果を共有することに賛成していると聞いて私は嬉しく思った。

## Rahan（ラハン）

私がラハンと呼んでいる赤ちゃんは、（個人情報の保護のため、すべての名前と身元の詳細は変更されている。）生まれたその日にナディラとその家族に託された。彼の 10 代の母親タマラは、彼を手放し養子に出すことを決めていた。ボーイフレンドが彼女に対して暴力を振るうようになったとき、彼女はソーシャルサービスを頼って支援を求めたのであった。後に彼女が家族の下に戻った際も、ソーシャルワーカーたちは彼女の身の安全を心配し続けた。タマラはラハンが生まれて数時間後に退院した。ナディラはその日のうちにラハンを連れて帰り、ラハンが 1 歳の誕生日を迎えた直後に養子縁組されるまで、里親として彼の面倒を看た。

私が最初に里親の家を訪れた時、ラハンは生後 2 ヶ月だった。

ナディラは真面目な顔つきをした、輝くような黒髪の若くて魅力的な女性で、私に温かい笑顔を見せてくれる。膝の上に横たわっているラハンは、哺乳瓶を咥えながら後ろの壁を見つめている。彼の顔は殻に閉じこもってしまった小さな老人のようで、彼の大きな顔のパーツと長い眉毛、そして高い鼻がどこかまとまりを欠いているように見える。

ラハンが泣き出し彼女は玩具を与えるが、彼はそれが目に入らないようである。私は、何かお気に入りの玩具があるのかと訊いてみる。彼女は『玩具はぜんぶ彼にとって同じです。…それにとにかく、この子はしっかりと握っていることができません』と言う。

やがて、彼女はラハンが自らの下に託された時の経緯を話してくれるが、そこにはまだ生々しいショックの感覚がある。見ず知らずの人から電話があり、翌日「病院から赤ちゃんを引き取って下さい」と言われたのだという。病院では、彼女の身分証明書を確認する間、外で待っているように言われた後、病棟の扉口で赤ちゃんを手渡された。家に帰る途中、彼女は、だれかが待ち構えていて揉めたり赤ちゃんを連れて行ったりするのではないかと怯えていた。

彼女が初めてラハンと一緒にいた時のことを私に話してくれるうちに、ラハンが泣き出す。彼女は彼を持ち上げて近くに抱き寄せると、毛布の上に寝かせて、彼をなだめるように話しかける。ラハンは顔を輝かせて全身を震わせると、手足を伸ばしてナディラの方に顔を向ける。

彼女は彼と過ごした最初の一週間のことを話してくれる。ナディラの心地よい声のトーンに耳を傾けながらラハンを見ていると、彼がまとまりをもってきたように見えて、私は驚きと感動を覚える。彼はさっきよりも全身がつながっているようであり、顔や目にも彩りがある。私はその姿にひきつけられ、希望さえ感じられる。ナディラは彼をじっと見て、「私たちでジェニファーにお歌を歌いましょうか？彼女はまだあなたが歌うのを聞いてないでしょう」と優しく呟く。

初回訪問 （2 ヶ月）。

歌を歌うというナディラの発想には、お祝いの匂いがあった。即ち、それは彼女とラハンが一緒になったことで、あたかも彼が彼自身と一緒になったかのように、ラハンがもっとまとまりを持つ存在となったことを記念しているようだった。これがビックの描き出した、母親の注目が持つ「まとめていく」作用である。この新しいプロジェクトを通して私たちが一緒になったことも静かに祝ってもらっているようで、私も歓迎されたと感じるのであった。

週に一度の観察訪問が始まる。半年後、ラハンが生後 9 ヶ月になった時、里親に 2 組の養子縁組の候補が知らされ、混乱した空気が立ち込める。次の観察訪問では、

ナディラが養子縁組の可能性のある家族のことを話している間、私は階段の途中に立っていて、どこに身を置くべきかわからなくなってしまう。やがて、彼女がラハンに食事を与えると、彼は食べものを戻してしまう。ナディラは「あまりにも色々あって.....あっという間だった」と呟く。

観察 26（10 ヶ月）。

私が次の観察に来ると、家には誰も居ない。観察をすっぽかされるのは初めてのことであり、私は突然観察が終わって、準備もお別れをする暇もなく、ラハンにも彼らにも二度と会えなくなるのではないかと心配になる。次の訪問でナディラは、先日の家族は除外され、ソーシャルワーカーが新しい養子縁組先を探していると私に教えてくれる。彼の養子縁組先が決まるまでには、さらに 3 ヶ月がかかる。このような宙ぶらりんの状況では、ナディラが里親として、ラハンが次の発達段階へと進む手助けをすることは難しい。自分の子ども達に、彼女がラハンにまだ着せていたベビーウェアが小さすぎると指摘され、
彼女は彼に小さなジャケットを購入するが、ショッピングセンターでジャケットを紛失して取り乱してしまう。ラハンがぼろぼろの風船で遊んでいるので、私は風船が彼の顔の前で破裂するのではないかと心配になる。

この時点で、私はいつどうやって専門家チームとコンタクトをとるのか、そしてそのネットワークの中で自分の居場所を見つけるのか、それを見出すことが難しいと感じる。これまでにソーシャルワーカーの交代が 2 度あったが、新しいワーカー達がどれだけラハンのことを知っているのか、あるいは私の役割を理解しているのか、私には分からない。ある時、たまたま私の観察と、社会的養護を受けている子どものためのレビューミーティングとが重なる。

ラハンのソーシャルワーカーが交代し、学生のソーシャルワーカーが担当となった。偶然にも彼女のファーストネームがラハンの名前に似ている。私はこのことが、二人の間に何かつながりが生まれ得ることを示しているのではないかと期待している自分に気が付く。観察 29 （11 ヶ月)

夏を迎え、里親の家では屋内と屋外とを橋渡しするような行き来の工夫がなされる。ナディラは、ラハンが自由に歩き回れるように、玄関前に囲いをした安全な空間を作る。ラハンは青いショートパンツと T シャツを着て、心地よさそうで逞しく見える。しかし、ラハンが養母に会う前の最後数回の観察のことは、私には考えるのも思い出すのも難しい。時々、彼が部屋から部屋へとウロウロと歩き回ったり、夢うつつのような状態で座ったりしている姿を私は目にする。ナディラと彼女の娘が、ラハンがキャッチできるようにシャボン玉を飛ばしても、ラハンは座ったまま、シャボン玉が宙に浮いているのを眺めている。私もどこかぼーっとした感じで、自分が時間の感覚を失っていることに気が付く。

ラハンは夢を見ているような表情で私の方を見る。ナディラは、彼が最近、白昼夢を観てばかりいるのだと話してくれる。彼女はラハンに、葉っぱが風に吹かれているのを見ているのかと尋ねる。ラハンは隣家の男の子たちと一緒に路地を行ったり来たりする。男の子たちは彼のためにボールを蹴り、彼はボールが転がるのを追いかける。風が髪を乱すと、彼は目を半分閉じる。 彼は両手を耳に当て、おなかをこする。彼は「ほぉぉ」と言い、風のような音を出す。

ラハンの移動について考えながら、ナディラは私に向かってこう話す。「移動のことはずっと考えてきたし、予期していたし、今も考えています。今、まさに起ころうとしているのです」と。

観察 35（12 ヶ月 2 週間）。

ナディラは今後のプランについてのミーティングを「とても重苦しい」と表現し、私はラハンのソーシャルワーカーから、「スケジュールがいっぱい」で私が養母に会えるか検討の余地はなく、ラハンを新しい家で観察し続けることはできないと聞かされる。ナディラもこのことについてはがっかりしていると口にする。彼女は、ラハンが新しい家に移っても、私の訪問という形で継続性が保たれることを望んでいた。彼女自身も、ラハンが養子縁組先の家に移った後で彼に会うことができるかどうか、何の連絡も受けていない。

ラハンと養母が引き合わされ、養母が里親の家でラハンと一緒に過ごすための時間は 4 日間に短縮される。そして、ソーシャルワーカーが同行できなかったため、養母がラハンを連れて一人で別の地域の自宅まで移動する予定となる。ナディラは、自分が一緒に行くと申し出たが、それは許されないと言われたと私に話す。ラハンの養子縁組先への移動プランは、里親と赤ちゃんが病院から無防備で何の橋渡しもない旅をした時のことを反復しているようである。

私は同僚と振り返りを行い、ラハンと里親との間に見た親密さや、彼が分離にとても敏感であることを伝えるため、1 年間にわたる観察をもとに、この機会にプラン作りに参加することを決める。今やラハンは生後 13 ヶ月となり、逞しく、バラ色の頬をしていて活発だが、里親が注目を注いでしっかりとつなぎとめておかないと、手が届かなくなってつながりが切れてしまうラハンの姿も、私は心に描き出すことができる。観察に基づく生の経験を通じて、彼のソーシャルワーカーたちに、里親から養子縁組家庭への移行がより統合的で継続性をもったものであることの必要性について、私は説得力を持って伝えることができる。そして、ナディラが新しい家に同行し、ラハンが翌日に落ち着いて過ごせるように近くで一晩滞在することが合意された。このような、より人間味とつながりのあるプランについて知ることで、ナディラは里親の下での最後の数日間、ラハンに対する情緒的な応答性を保つことができたのだと私は思う。最後の観察からの抜粋である。

> 暑くて晴れた日である。ラハンはおむつと T シャツで快適そうに見える。彼は玄関ホールにある靴を指差して「靴」と言う。彼は、先端に赤い球のついた長い木の棒で遊びながら、その球でものを指したり触れたりする。やがて彼は、ディナ（7 歳になるナディラの娘）を膝に乗せて座っているナディラの傍らでメソメソしながら立っている。ナディラはディナに降りるように言い、ラハンを膝の上に乗せる。彼は彼女に抱えられ、体にぴったり寄り添う。彼女は彼にイチゴを食べさせる。彼は喜びに顔を輝かせて彼女の顔を覗き込み、彼女は彼にキスをする。
>
> その後、男の子たちと路地裏で遊ぶ。彼は柔らかい靴の先につまずき、何度か転倒する。その都度、彼は自分の手と前腕で自分を支え、頭を上げたまま、倒れた時の衝撃を和らげている。あいつは怪我をせずに転ぶ方法を知っていると男の子たちが言う。
>
> 観察 37（13 ヶ月）。

ラハンが居なくなった後のナディラの最初の訪問では、彼女も娘のディナもラハンの夢を見たと話してくれる。ナディラは、ラハンが養母といて安心できるように、一生懸命に養母とつながりを作ろうとしたことを私に語る。ディナはラハンのために作ったモビールを見せてくれる。里親家族のそれぞれに異なるシンボルがあり、モビールの真ん中にはラハンと養母を表す太陽と月が描かれている。

2 ヶ月後、養子縁組家庭が里親を家に招いたことを私は耳にする。ナディラは、今後もまたラハンに会えるのかどうか未だに分からないが、4 ヶ月後に私がナディラと再会すると、両家の間に芽生えた親密さについて聴き、私は安堵する。

## 考察

この一事例研究から、養子縁組に移るまでの間、赤ちゃんと里親の治療的観察を行うことが可能であることが示された。週 1 回の観察訪問は、里親からもソーシャルワーク・ネットワークからも受け入れられた。里親は私を家に迎え入れ、自分の観察したものを私と共有し、赤ちゃんの発達状況について逐一私に教えてくれた。彼女は、私の定期的な訪問のお陰で里子との距離が近くに感じられ、自分が里親としての役割を果たす上での支えになったと話してくれた。

ラハンを取り巻く状況は、ケア手続き※が一度も行われなかったこと、養子縁組に移るまで一度も委託先の変更がなかったこと、生みの家族とのコンタクトが全くなかったことなどの点で、特異なものであった。そのため、彼の事情は社会的養護を受けている大多数の乳幼児の場合と大きく異なるが、私はこの研究を行うことで、移行の際に赤ちゃん達がどんな体験をしているのか、その普遍的な要素について理解を深めることができた。毎週の訪問を通じて、私は里親と子どもが共に歩む道程の激しさを幾分か体験することができた。私は、人生のまさに最早期における混乱が及ぼす途方もない影響や、いつかはその子が去っていき再び会えるかどうかも分からないと知った上で、成長していく乳幼児のために自らの心と精神の内に彼らの家を用意する里親とその家族の持つ情緒的な忍耐力、そして、里親が生みの親と養子縁組先の親とをつなぐ架け橋となり、常にどの程度手を差し伸べるか、またはどの程度距離を置くかを判断するという非常に複雑な役回りについて、より深く知るようになった。

※ケア手続き(care proceedings)：子どもの安全と福祉について深刻な懸念がある場合、地方自治体が子どもを保護するための許可を求めて裁判所に行う申請のことをケア手続きという。（監訳者注）

また、社会的養護を受けている赤ちゃんのための「共同養育」※についても、それがどんなものなのか私は身を以て知ることできた。養子縁組先への移動が、生みの母親から里親への唐突で何の橋渡しもない移行の反復となるリスクがあったが、これは親密さが暴力と結びついていた、彼の生みの家族における荒れた人間関係の影響を反映したものであったかも知れない。

※共同養育(corporate parenting)：社会的養護を受けている子どもに対して、自治体や連携諸機関および関係者の全てが協力しあって、子どもの養育と安全のために共同で責任を持って親としての役割を担うことを指す。（監訳者注）

移動が近づくにつれて、ソーシャルワーク・ネットワークとのコミュニケーションを維持することがいっそう難しくなっていったが、私は自らが観察したものを活かして、養子縁組先への移動に向けたプラン作りに貢献することができた。プランが形になっていく中で、私は自分の声をあげる機会が減っていくことを経験したが、これはラハンの育て親でありながら彼の将来についての決定に一切かかわれない里親に、私が同一化していたことを反映しているのかも知れない。私のこの経験はまた、養子縁組が近づくにつれて、継続性へのニーズや主たる養育者へのアタッチメントなどをすっかり忘れ去られてしまったかのようであったラハンとの同一化を反映している可能性もあるだろう。同時に、私はソーシャルワーカー達の心に残された懸念や不安のことも念頭にあった。ラハンの里親委託の最後の段階で、私が自分の考えや気持ちを言葉にしたことは、治療的な観察者としての役割の中で、彼が里親の下で受けた養育や、彼の発達において欠くことができないと思われた「つながり続けること」のために声をあげることを意味していた。養子縁組先への移動をどうするか、そのやり方を巡ってそれぞれの専門家が自らの見解に固執して衝突が起きる可能性もあったが、私が自らの観察によって得た詳細な情報を持ち込むことによって、ラハンの精神状態や彼のニーズに焦点を当てることにつながったように思える。移行に際して「すっぱりと切る」という考え方から、彼を取り巻く大人たちが手を取り合う方がラハンにとって一番の支えになるという考え方にシフトする上で、この観察的な視点が役に立ったのである。

地方自治体の里親サービスとソーシャルワーク・チームは、この研究の結果をどのように実践や訓練に役立てることができるか話し合うことに好意的であった。研究結果が広まるにつれて、乳幼児とその里親の支援のための紹介や、彼らのニーズについての研修の依頼が増えていった。

この研究によって、学ぶべき領域も多く生まれた。私が養母に会うことも、新しい家でラハンの観察を続けることもできないという残念な結果は、移動プランに際して、臨床家である観察者が継続性を最大限に保つことの意義を最初から積極的に唱えていく必要性を浮き彫りにした。

## サービスの背景

観察に基づく介入は現在、「ファーストステップ」で提供されるサービスの一部となっている。「ファーストステップ」は、地方自治体の下で社会的養護を受けているすべての子どもと若者たちの心理的なニーズを同定し、これから社会的養護を受ける子ども達のために、最大 6 セッションの短期介入もしくはアセスメントを行うことを業務とする精神保健サービスである。このような通知モデルによって、より広範な子どもと若者たちへの介入の機会が得られ、そこには社会的養護を受けている乳幼児がケア手続きの前、最中および後を問わず含まれている。このような子ども達が精神保健サービスに紹介されることは滅多になく、彼らは大抵、高レベルの心理的逆境やストレスにさらされているものの、診断可能なメンタルヘルス上の障害を有していない。子どもによっては、出生前から薬物やアルコール、そして家族内葛藤やドメスティックバイオレンスによる母体のストレスにさらされたり、繰り返される喪失や主たるアタッチメント関係の中断の影響を受けたりしており、そこに幼少期から虐待やネグレクトを経験することで、発達が二重に損なわれてしまう可能性がある。それに加えて、彼らの情緒的ニーズおよびメンタルヘルス上のニーズは見落とされたり過小評価されたりしがちであり、その結果、彼らは適切なサポートやタイムリーな治療を受けることができないのである。

私が専門家ネットワークの中で、治療的な観察者としての立ち位置を見出すのに苦労した経験は、このアプローチを臨床的な介入として確立していく上で重要な学びのポイントとなった。私が紹介する 2 番目の事例は、乳児観察の訓練を受けた臨床ソーシャルワーカーである同僚のマルティナ・ウァイラントが行った治療的観察である。私たちは専門家ネットワークとのコミュニケーションを維持する必要性を最初から念頭に置いていた。私たちはこのサービスモデルを、彼女の CPD※の一部とすることで、通常の短期的な介入を超えた 2 年間に渡る介入を提供することができた。

※CPD：イギリスでは専門職の知識や技術の維持発展のための生涯学習制度が広い分野で確立しており、Continuing Professional Development(専門家としての継続技能研修)と呼ばれている。（監訳者注）

## Ania（アニャ）

アニャは生後すぐに社会的養護を受けることとなった。彼女の両親はともに深刻なメンタルヘルス上の問題と薬物乱用に悩まされていた。彼女は、母親が大量のヘロインを服用したため胎児切迫仮死を呈し、4 週間の早産で生まれた。彼女は、胎内でコカインにも曝露されていた。新生児病棟でアニャは、病棟に勤務する看護師から交代制で 3 週間の専門的ケアを受けた。胎児期に受けた薬物曝露とそれに伴う離脱の影響の一つに、耳をつんざくような長い啼泣がある。このような赤ちゃんはなかなか宥めることができず、時には何時間も休みなしで抱っこしてあやす必要が生じる。

アニャは、他に 2 人の幼い子どもの世話もしている里親のもとに預けられた。アニャはぐずり始めるとどうにも宥めることができず、里親は自分たちの手に負えないと感じて、生後 3 カ月で委託終了となった。今や、アニャははじめて得た家で慣れ親しんだ声や匂い、そして日々のルーチンから離れ、更なる分離に直面することとなった。彼女はその後、経験豊富な養育者であるシャロンの下に預けられた。シャロンには他に世話をする子どもはなく、成人した娘の手助けもあったため、一日の大半を通じてアニャだけに注意を注ぐことができた。

最初の数日から数週間にかけて、シャロンはアニャが何を欲しがっているのか理解することが難しいと報告した。アニャは絶え間ない注目を必要としていた。彼女に哺乳瓶からミルクを飲むよう促すには大変な忍耐を要した。彼女は落ち着かせることも宥めることも困難で、夜中に何度も目を覚ました。さらに心配だったのは、彼女が時々引き籠った状態になり、周りの人にほとんど反応しなくなってしまうことであった。私たちは、ケア手続きが進行している最中およびその終了後、里親の下を隔週で訪問して観察介入を行うこと、そして専門家ネットワークと定期的にミーティングを行うことで合意した。

最初の訪問でマルティナが経験したのは、アニャが積極的に自らの認識から彼女を締め出しているように見えることであった。アニャはマルティナから顔を背け、彼女が話しかけても反応を示さなかった。彼女の真剣な表情は滅多に変わることがなかった。二回目の訪問の間、アニャはまたしても非常に遠くに感じられたが、マルティナが彼女と二人きりで残されてしばらくすると、アニャはおずおずと彼女の方に近づく動きを見せた。

> アニャは虚ろな瞳でじっと私を見つめ、それはとても長い時間のように感じられた。それから彼女はゆっくりと腕を動かし、私の手首に手を置いた。彼女のそっとした動きと、羽のように軽い触れ方に私は驚いた。それはまるで、彼女を吹き飛ばさないように私が息を止めていなければならないかのようだった。アニャは私の顔を覗き込み、その目は明るさを増していた。シャロンが戻ってくるまで、私は本当にじっとしたまま彼女に静かに話しかけた。

マルティナは、アニャとのコンタクトはゆっくり少しずつ行う必要があることを学んだ。動きが速すぎたり音が大きすぎたりすると、 彼女は即座に引き籠ってしまうのであった。しかし、いったんコンタクトが成立してしまうと、それはとても強烈なものとして感じられた。時が経つにつれて、マルティナはシャロンとのやりとりでも似たようなことに気がついた。訪問は頻繁にキャンセルされ、アパートの入口のベルを鳴らした後、数分待っても返事がないので、訪問のことを忘れているのか、あるいは訪問して欲しくないのかと疑問に思うこともあった。しかし、一度家に入れてもらうとマルティナは温かく迎え入れられ、彼女の訪問が期待されていたことに疑いの余地はなかった。それはまるで、里親と赤ちゃんのカップルのまわりに、通り抜けるのに相当な忍耐を要する保護膜があるかのようだった。

マルティナがアニャの下を訪れて 2 か月が経った頃、シャロンはアニャの母親が薬物の過剰摂取のため死亡したというショックな知らせを受けた。アニャの母親の死の影響は甚大で、それまで良好に確立されていた専門家ネットワークの結束はバラバラになってしまった。この間、電話もメールも返事がなく、シャロンは真空状態の中で、自分がアニャにとってただ一人きりの養育者だと感じているようだった。彼女はアニャの代わりに痛みと悲しみを味わい、生活の中で彼女の最も身近にいる大人としての責任を感じていた（アニャの父親は手を引いてしまい、アニャとも彼女のソー

シャルワーカーとも、もう連絡を取らなくなっていた）。この時期、ショックと苦悩の気持ちを分かち合い、アニャのために心を砕く感覚を共有する治療上の仲間としてのマルティナの役割は、非常に重要なものだと思われた。

しばらくしてマルティナは、里親宅のリビングの家具の配置が新しくなっていることに気がついた。ソファとアームチェアが部屋の中央に円を描くように配置され、小さなテーブルが、この閉じたクッション付きの空間に入っていくための、可動式の出入口のようになっていた。この配置は子宮のような空間と、過酷で危険なものと感じられる外界からアニャを守るための保護的緩衝帯を表しているように見えた。ここでは彼女の安全が守られており、死別の衝撃はゆっくりと処理され、時には脇に置いておくことができるのであった。マルティナが里親宅への定期訪問を確立するために、外から内への境界を越えるべく手を伸ばし続けなければならなかったのと同じように、今やソファの輪の中に入るのも一苦労であった。

しかし一度中に入ってしまえば、「あなたも中に入ってきたから、これで私たちは本当にただそこに居ることができる」と言われているような感じがしたと、彼女は描写している。このことは、過去や未来からの過剰な侵襲なく、この瞬間を生きることの大切さを強調しているようであり、それはアニャが里親宅を離れる時期が近付くにつれて特に強く感じられた。

マルティナはこの時期、専門家ネットワークとのコミュニケーションを再確立するには、忍耐が必要だと感じていた。しかし、里親宅への訪問と同様、一度コンタクトができれば、それは歓迎されているように思えた。アニャの拡大家族たちの評価が肯定的なものとなると（アニャの父親は彼女の世話を買って出ることができなかった）、シャロンは彼らのことをとても知りたがった。それはアニャがこれから誰と一緒に生きていくのか知るためだけでなく、彼女がまだシャロンに安心を求められるうちに、アニャが自らの将来的な養育者を知ることができるようにというものであった（Beek, Neil, & Schofield, 2018 参照）。マルティナは、アニャが動揺したり疲れていたり傷ついたりしていると、シャロンからの慰めを受け入れるのもやや渋々といった様子だが、少しずつシャロンに頼る様子が増えてきたことに気が付いていた。このお陰でシャロンは、アニャが自らのニーズを伝え、将来の養育者から慰めを得ることができるだろうと感じることができた。

マルティナが専門家ネットワークに継続的に関わっていくべきだと声をあげたのは今やシャロンであった。彼女はプラン作りにはマルティナが不可欠であり、新たな養育者がアニャに会いに来る最初の時には、マルティナも同席すべきだと主張して、次のように述べた：

あなたはこれほど長い間、私たちを訪問しに来てくれています。あなたは見てきたのです。

マルティナは自らが観察してきたものをもとに、アニャが新たなアタッチメントを形成し、音も匂いも何もかもが異なる別の国の新しい家に移動するにあたって、どんなことが起き得るのか、新たな養育者たちが想像する手助けをすることができた。彼女は重ねてきた観察に基づいて、アニャがあまりにも多くの新しい経験や新しい大人たちに出会うと、すぐに圧倒されてしまう様子を描写することができた。こうして彼女は、アニャが段階的で統合的な移行を必要としていることを主張し、一つ一つの段階でソーシャルワーカーや家族のメンバーらと一緒に考え抜いていくことができたのである。移動の後、私たちは、拡大家族が一堂に集まったこと、アニャの新たな養育者たちが今でもシャロンと連絡を取り合っていること、そして将来もし必要になった場合には、地元のサービスから心理面でのサポートを受けられるように手紙を送って欲しいとマルティナに頼んだことなどを耳にした。

アニャだけにひたむきな注意が注がれることで、彼女の中に深い反応が呼び覚まされたようであった。それは、将来的な移動など考えることもできないと思われた時期に、シャロンとマルティナの双方に希望を与える一助となった。その希望の一部は、アニャが全ての注目を自分に注いでもらったという体験を取り入れることが出来たということであり、それが新たな家庭への移動や、将来彼女を待っているであろう困難の際に、彼女を支えてくれるものになるかも知れない。

## 考察

この介入を通して中心的な課題だったのは、専門家ネットワークを結集して、アニャを彼らの思考の前景に置き続けること、そして重要な局面で遅れが生じる可能性を減らすことにあった。観察者としての役割を果たす上で、「中に入って」いき「つながりを保つ」ためにいっそうの努力が必要だったが、それは彼女の母親が亡くなった後、また彼女の永続的な委託先が決定し彼女が里親の下を離れる日が近づくにつれて、より顕著となった。里親宅で行った観察をもとにアニャの発達の様子を描写することで、専門家ネットワークがバラバラになった時期に、コミュニケーションと再度の連携のための焦点を創り出すことができた。それはあたかも、生きた成長の核が、より希望に満ち生き生きとした関係性を再形成していくための中心核を成しているかのようであった。

多職種チームが、社会的養護を受けている最年少の子ども達やその里親たちと向き合い、情緒的な関わりを伴う養育のために声をあげていく必要性と直面する際に味わう、ストレスや困難について理解していく上で、この事例から得られた学びの価値は計り知れないものであった。このような理解は、里親だけに限られたものではなく、専門家ネットワークの間でも共有された課題である。

里親たちが手を差し伸ばし、情緒的に応えられる状態でいるためには、彼ら自身が大切にされ、子どもを育てるために結集したグループの一員であると感じられる必要がある。観察的なアプローチは、ネットワークの業務に情報を提供し、子どもも養育者もともに必要としている情緒的な関与を生き生きとしたものに保つ一助として、特別な価値を持つものだと私は思う。専門家ネットワークが共に集まって想いを馳せ、養育者と子どもが親密さを育むための支持的な環境を提供することは、思考と感情がまとまりを得て意味を生み出すことを促進する。これこそが、Bion(1962)がコンテインメント、α機能、そして母親のもの想いとして描き出した内省機能である。

弱い立場にある乳児の大多数は長期的な介入を得ることができないため、彼らのニーズを念頭に治療的観察アプローチの応用版として、Watch Me Play！という短期の介入が開発された（Wakelyn, 2019, 2020）。

## Watch me play!

Watch Me Play! アプローチは、子どもとその遊びを直接かつ詳細に観察したものを共有することで、赤ちゃんや幼児の体験について、専門家ネットワークや家庭裁判所の思考に生き生きとしたものを持ち込む一助となるという経験から生まれてきた。Watch Me Play！は、子どもの主体的な遊び、養育者からの個別の注目、また、子どもと彼らの行っている遊びについて話をしたり、遊んでいる子どもの傍らに居ることがどんな体験なのか養育者と話し合ったりすることを推奨している。養育者たちは、子どもの年齢にふさわしい玩具を与え、静かな環境で週に 2 回以上、約 20 分間に渡って全ての注目をその子どもに注ぐよう励行される。養育者たちはまた、子どもと彼らの遊びについて話をするとともに、子どもの遊びを観察して気付いたことや、子どもが遊ぶ傍らに居てどんな気持ちになったかについて、後から他の関係者である大人や専門家と振り返るよう促される。

## ヘンリー：遊ぶことができなかった 2 歳児

ヘンリーは、実家で重傷を負ったために治療を受けていた病院から、2 歳の時に里親に引き取られた。4 ヶ月が経過し、彼の食事や睡眠の乱れと多動傾向について懸念がみられた。専門家ネットワークは、ヘンリーを「竜巻のよう」と表現した里親のアーシャのためのサポート役を探していた。私は里親を訪問した時に、ヘンリーが絶えず走り回り、時折立ち止まっては玩具を拾って投げる様子を見て、彼女が言っている意味を理解した。私たちは二人で床の上に座って、彼がしていることについて静かに話し続けた。私は、テレビのスイッチを切り、電池で動く玩具は少数のぬいぐるみや動物の玩具、車、パズルなどに置き換えるようアドバイスした。徐々にヘンリーは落ち着きはじめ、主に 2 台の玩具の車で遊ぶようになった。それからの数週間、アーシャは、自分がいつもヘンリーが車同士を衝突させて遊ぶ様子を描写していることに気が付いた。しばらくすると、彼は車をソファの下に押し込むようになり、アーシャにそれを見つけるようにせがみはじめた。訪問と訪問の間、アーシャと私は電話で話をした。彼女は、この遊びが気の狂いそうなほど不快に感じていると私に話した。私も、ヘンリーの遊びはとても支配的かつ反復的だと感じたが、同時にヘンリーが時折、アーシャと私の方にちらっと目をやる様子にも気付いていた。彼は私たちのことをチェックしているようだった。ヘンリーの人生早期の歴史を鑑みると、彼は、身の周りの大人たちに常に目を光らせていることが本当に必要なのだということを、車を使った遊びを通して私たちに理解してもらおうとしているように思えた。

私たちがこうしたことを話し合った後日、アーシャはヘンリーの遊びに大きな変化があったと話してくれた。彼は自分で自分の車を「見つける」ようになってきたのである。アーシャはとてもほっとしていた。彼女はまた、ヘンリーが遊びをもっと楽しめるようになってきたようだと言って喜んだ。私たちは、彼が最近では他の玩具にも手を出せるようになったことに気が付いた。ヘンリーは時々、玩具の動物たちに話しかけたり、アーシャが童謡を歌うと一緒に歌ったりするようになった。彼の食事の問題は解決し、夜も一晩中寝ていられるようになった。ヘンリーの養子縁組の話が持ち上がると、養父母はヘンリーが何を必要としているのか、自分たちがどうやったら彼の助けとなり得るのか、熱心に考えた。彼らは導入の時期から養子縁組の最初の数ヶ月間まで、Watch Me Play! のセッションを継続した。私は彼の新しい両親に電話によるサポートを提案した。私は、彼が養子縁組の家で力強く成長し愛らしい子どもに育ったと聴いて、とても嬉しかった。

## 考察

注目と遊びは補完的なものである。温かさと関心を持って観察することは、子どもの遊びを促進する。やがて、子どもの遊びに焦点が生まれてくると、大人にとっても遊びの内容を覚えておくことや、そのことについて考えることがより簡単になってくる。子どものことを心に留め置くことは、子育てにおいて欠くことのできない要素であるが、それは人生早期の混乱によって深刻な影響を受ける場合がある。子どもが遊びの中で表しているものを大人が受け止めることができれば、子どもの「苦悩や不安を一人きりで抱えている」という感覚はやわらぎ、人生早期のトラウマの影響を緩和することができる。

Watch Me Play! は、子ども達が主体性の感覚を取り戻し、世話をしてくれる大人たちが自分のコミュニケーションを受け止め真剣に扱ってくれるという自信を胸に、自らの世界や人間関係を探求していく機会を提供する。またこのアプローチは、逆境体験や理解の難しいニーズを抱えた子ども達への初期介入として、より広範な活用もなされている。ワーク・ディスカッションは、Watch Me Play! のアプローチを活用し始めた臨床家のための、理想的な討論の場と彼らをコンテインする構造を提供するものである。

Watch Me Play! のマニュアルは、Tavistock/First Step の以下のウェブサイトから評価フォームと一緒にダウンロードできる。https://tavistockandportman.nhs. uk/care-and-treatment/our-clinical-services/first-step/watch-me-play-supporting- babies-and-young-children-care/

マニュアルの翻訳は現在、イタリア語、日本語、ウクライナ語で行われており、完成次第、学校で使用するための改訂版とともにウェブサイトで公開される予定である。

## 結語

注目は、子どもが心に抱えられていると感じられるようになる上で、本質的な役割を担っている。また内的な継続性は、子どものパーソナリティを支え、トラウマの影響で心がバラバラになってしまうことから子どもを守るものであるが、時間をかけてこの継続性を育んでいく上でも、注目は欠くことのできない役割を果たしている。治療的な観察においては、フロイトが描写した注意の持つ能動的側面と受動的な側面が時間的に分離されている。すなわち、定期的な訪問や観察者の限定された役割によって、知覚したものを受け止めるための設定が創り出される。注目の持つ能動的な側面、「これは一体何を意味しているのか？」という観察思考は後から、スーパービジョンにおけるディスカッションや、この種のワークが涵養する、臨床家が心の中で行う継続的な情報処理と内省の際に出番となってくる。

フロイトが指摘した、注意の持つエネルギー充足的な側面は、深刻な剥奪を経験し、絶望の幽霊がすぐそこに立っているような子ども達とのワークにおいて、特に役立つ場合がある。観察的なワークにおいて、絡み合った力動がゆっくりと解きほぐされていく様子や、瞬間瞬間のやりとりの持つ重要性に焦点を当てることで、私たちは、トラウマの影響が今なお進行中であることと、発達へと向かう生命を求める欲動の持つ強さの双方を思い出す貴重な機会を得ることができる。このことは、「家族という枠組みを超えて」活動するチームにとっては特に重要であり、そこでは応答性と継続性という基本原則を常に再発見・再確立していく必要がある（Houzel, 1996）。トラウマの持つ力動が反復強迫に支配されている一方で、注目の持つ力によって集結したグループは、何か新しく生き生きとしたものを生み出す可能性を秘めているのである。

## 開示声明

著者による利益相反の可能性は報告されていない。

## 投稿者に関する情報

Jenifer Wakelyn（ジェニファー・ウェイクリン）は、アーティストとして、また幼児教育の分野で働いた後、児童青年期心理療法士の訓練を受けた。彼女は、ロンドンで社会的養護を受けている子ども達のための精神保健サービスの副部長兼、児童青年期心理療法士の長として活躍している。彼女は Tavistock Centre の児童心理療法部門および個人開業の場で、教育とスーパービジョンに携わっている。彼女は英国と欧州で「Watch Me Play！」に関する研究を発表している。彼女の著作「Therapeutic Approaches with Babies and Young Children in Care:Observation and Attention」（社会的養護を受けている乳幼児の治療的アプローチ：観察と注目）が、最近 Routledge より出版された。

早稲田大学研究院総合研究機構
社会的養育研究所
監訳チーム
担当：半田 聡（千葉メンタルクリニック）
2023（令和５）年　３ 月

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION